

# イスラーム復興の潮流とその行方

**小松久男** 東京大学大学院人文社会系研究科教授

これから中央アジアのイスラームの復興という問題について、お話をします。中国から国境を越えますと、旧ソ連の中央アジア地域です。中央アジアで現在起きていることは大きく言いますと、ソ連という大国が解体して、各共和国が独立し、あらゆる面で大きな変化が進行中です。その進行中の大きな変化の一つが、イスラームの復興という問題なのです。今日はそこに絞ってお話をしていきます。



## ——中央アジアのイスラーム

中央アジアのイスラームについて、少しだけ簡単な前置きとして、歴史的な背景を大まかにさらっておきたいと思います。中央アジアのイスラームの受容は8世紀に始まり、その後、徐々に進展していきました。このイスラームは中央アジアの歴史あるいは文化の基層において、たいへん大きな役割を果たしてきました。

いわゆるイスラーム世界というものを我々がイメージした時、中央アジアはかなり辺境に位置するように見えるかもしれませんが。普通イスラームというと、日本では中東地域をイメージすることが多いでしょう。ですから中央アジアというと、田舎のイスラームのようなイメージが付きまといまいます。しかし、よくよく見ていきますと、中央アジアはこのイスラーム文明にたいへん大きな貢献をしていることがわかります。

一例を紹介いたしますと、9世紀に、中央アジアのブハラという町に生まれた学者がおり、この人はブハラの出身なのでブハーリーという名前と呼ばれているのですが、この人はたいへん重要な仕事をしたことで知られています。預言者ムハンマドの言行録を集めて、その中で本当に正しいとされる伝承をまとめた人です。預言者ムハンマドは、神の啓示を受けて、イスラームを人間社会に伝えた人です。コーランがイスラームの聖典であることはよく知られていることですが、それに

続いて、やはり預言者ムハンマドが生前語ったり、教えたり、振舞ったりしたことに関する伝承は、後のイスラーム教徒にとっても手本としてたいへん重要な意味を持っていました。

当初、預言者ムハンマドの言行録というのは口から口へと伝えられていたのですが、人間の口を介して伝わってきますと、話はどんどん変わってしまうものです。それではいけないということで、ブハーリーという人は各地を巡り歩いて、100万とも伝えられる伝承を集め、その中で本当に正しく伝えられてきたものだけを厳選して、これを『真正集』と呼ばれる書物にまとめました。

これがスンナ派のイスラーム教徒の間では、最も信頼できる預言者ムハンマドの言行録として、今日に至るまでずっと読み継がれているものです。日本語の翻訳もあります。世界の、特にスンナ派のイスラーム教徒の間では、このブハーリーの名前を知らない人はおそらくいないでしょう。

こうしたことが示しますように、中央アジアというのは地理的には北の辺境なのですが、文化や思想など、様々な面でイスラーム文明に貢献してきました。これはやはり中央アジアのイスラームを理解する上では、重要なポイントの一つと言えるでしょう。

こうしてイスラームを基盤として社会の秩序ができあがっていたのですが、19世紀の半ばを過ぎますと、この地域は南下してきた帝政ロシアの植民地となってしまいます。ちょうど日本が明治維新で近代化改革を始めた頃に、中央アジアはロシアの統治下に組みこまれるということになります。ロシア人という異教徒の統治下に置かれたのですが、それにもかかわらず、ロシア統治のおおまかさにも助けられ、イスラーム自体は活力を維持したまま、むしろ活性化する形で展開していました。

現在でも中央アジアに行きますと、ロシア統治期に建設されたモスクや、マドラサという学校がたくさんあります。当時の中央アジアのイスラーム教徒は、確かにロシア人の統治下ではあるのですが、自分たちのイスラーム法はきちんと守られているという意味ではイスラームの世界であるという認識を持っていました。

一つの例ですけれども、この写真（写真01-a、b）は、ウズベキスタンの首都タシュケントの郊外にあります、ある有名な聖者廟



写真01-a タシュケント郊外のゼンギー・アタ廟（写真はすべて筆者撮影）

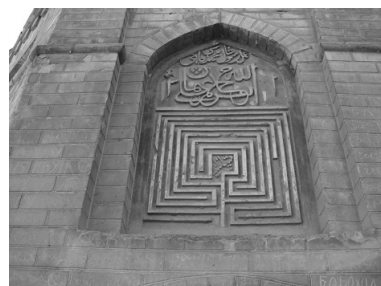


写真01-b 同廟のミナレットに見られる刻文

です。ここにミナレットがあり、この壁にこういう模様が刻まれているのです。なかなか面白い模様ですが、実は皆さんもおなじみの迷路なのです。この上にはヒジュラ暦で1322年、すなわち西暦1904年という制作年とならんで、預言者ムハンマド、それから彼の後を継いだ4人のカリフの名前がたくみに刻まれているのです。この迷路は、ずっと入っていくと中心には「コンスタンティニーヤ」と書いてあります。

コンスタンティニーヤというのはイスタンブールのこと、つまりオスマン帝国の首都です。当時のオスマン帝国の首都とは、イスラーム世界の精神的な権威であるカリフがいたところなのです。要するにこの迷路の心というのは、自分たちはカリフから遠く離れたところにおいて、なかなかそこに到達することはむずかしいけれども、心はそこに向いているということなのです。イスラームの初期の時代のカリフたちの名前があるように、こういう形で自分たちのイスラーム共同体への帰属意識とカリフへの忠誠心を確認したのでしょう。実はこの聖者廟は、タシュケントの街からはそう遠くない所にあり、いわば植民地統治のお膝元で、人々はそういう意識を表明していたということになります。

## ——ソビエト政権下のイスラーム

これが大きく変わるのがロシア革命の時代です。帝政ロシアが倒れて、社会主義の時代に入ります。そうなりますと、イスラームの地位は大きく揺らいでいきます。

実際にどんなことが起こったのかと申しますと、革命から数年経って1924年のこと、中央アジアには史上初めて民族別の国ができました。それ以来、人々の間には、徐々に民族への帰属意識が培われていくことになりました。一方でイスラームが持っていた地位や役割が奪われていくことになります。もとよりソビエト政権は、イスラームという宗教そのものが社会や文化の発展を阻害するものであり、しかも宗教と科学は両立し得ないという無神論の立場で、イスラームに対してきわめて抑圧的な政策を打ち出しました。イスラームの聖職者に対しても、大変厳しい政策がとられました。それからモスクや学校が次々と閉鎖されていきます。そしてイスラームの社会、文化的な伝統を一扫した上で、世俗的なソビエト文明が植えつけられていきました。中央アジアはたいへん大きな変化を経験したのです。

それではイスラームの伝統はまったく途絶えてしまったのかと言いますと、そうではなく、表面上は消えてしまったのですが、人々の家庭、あるいはいろいろな行事、結婚式や葬儀、そのような慣行の中にイスラーム的な伝統が、いわば民族の伝統という形でうけつがれていくことになりました。

イスラームの学問的な伝統が、ごく少数の学者たちによって、地下で秘密裏に

教えられる一方で、イスラーム的な慣行は人々の間に生き残っていました。私も1991年7月に、中央アジアに行ったことがあるのですが、ちょうどソ連が解体する前の月です。ウズベク人の家に招かれて、いろいろご馳走になったり、話をしたりしたのですが、そういう時にもコーランの一節やアラビア語の祈祷の言葉を、たとえ酒を飲んでも唱えるという実例に接しました。ソ連時代の厳しい抑圧にもかかわらず、そういう形でイスラームの慣行は生き残っていたということがわかったのです。

### ——変化のきざし

次からが今日の本題になります。こうした背景の下で、1970年代の末からどういう変化が起こったかということです。ソ連時代の末期、中央アジアの特に南部で、当初数は少なかったのですが、イスラームの復興を呼びかける動きが出てきました。彼らは自分たちを革新派と称して、我々は真のあるべきイスラームに回帰すべきだということを主張したのです。ソ連時代には、イスラーム教徒であろうとすればするほど、社会では疎外され、閉塞感にとらわれていたのですが、そういう中で自分たちの伝統、自分たちのアイデンティティというのは、やはりイスラームにこそあると考えた人々が、イスラームの復興を唱えはじめたのです。

その際に彼らは、たいへん厳格なイスラームを志向しました。中央アジアで認められていた、たとえば聖者廟への参詣とか、そういったことを全て否定して、コーランに書いてあるように自分たちの社会を運営しなければいけないという、厳格な方向性を打ち出しました。間もなくして、ソ連の隣のイランではイラン・イスラーム革命が起こり、またアフガニスタンでは侵攻したソ連軍に対するイスラーム教徒の抵抗運動が活発化する。そうした事件の衝撃もあって、このようなイスラームの復興という動きは加速していきました。

それに対して中央アジアの伝統的なイスラームを守ろうとする人々もいました。その代表者の一人がヒンドゥスターニーという人物です。彼はあまりにも厳格なイスラームは、自分たちの本来の伝統とは相容れないという立場で、革新派をなだめます。そういう方向性を諦めるように勧めたわけです。

たとえば、革新派が、かつて19世紀の末に帝政ロシアに対して聖戦＝ジハードを起こしたグループがあったのですが、こうしたグループを礼賛して、自分たちもジハードを起こすべきだと唱えたことに対して、このヒンドゥスターニーは、「あのようなジハードは、自暴自棄の意味のない戦いであった。そういうことを繰り返してはならない」という議論をしています。そこで彼は、コーランの一節、「我と我が身を破滅に投げこんではならぬ」という章句を引用しています。命をかけたジハードなど、神は認めていないのだという論理をもって革新派をなだめようとしたわけです。しかし、こうした説得もなかなかうまくいかず、この後も

革新派の勢力は次第に増大していきました。いわば同じイスラーム教徒の中で、伝統に従うグループと、厳格なイスラームを求めようというグループとに分裂して、さらに対立が深まるという状況になっていったのです。

## ——ペレストロイカからソ連解体・独立へ

一方、ペレストロイカの時代に入ると、ゴルバチョフ政権のもとで自由化が進み、イスラームと国家との和解もおおよそ70年ぶりに成立し、それによって、様々な新しい動きが出てきました。たとえば、それまでソビエト社会主義を礼賛してきた雑誌でもコーランのウズベク語訳を刊行するなどして、イスラームの価値や伝統を、自分たちの民族的な文化の一部として回復しようという動きが現れてきます。

それから政治的にもソ連邦の規模でイスラーム復興を志向するような政党が登場しました。この時代、中央アジアのみならず、北コーカサス、ヴォルガ・ウラルといった地域でも同じようなイスラーム復興が進んでいました。そういう中でソ連は解体し、中央アジアにはいくつかの独立した共和国が生まれたのです。

新しく独立した諸国は、ソ連の時代から引き継いだ世俗主義の原則を掲げますが、同時にイスラームも民族文化の重要な要素として尊重する、それとの融和を図るということが行われました。新しく就任した大統領たちは、コーランを前に宣誓していますし、あるいはメッカ巡礼も行いました。

一方、人々の間では、どういう変化があったのでしょうか。これまでいろいろな抑圧があったわけですが、それがなくなった結果、社会にイスラームが回帰してくるという現象が見られました。

これらの写真(写真02-a、b、c)にみられるように、モスクが改修あるいは新築されて、多くの人々がそこに参集することが可能になりました。この写真はウズベキスタンのある町ですが、人々の自発的な喜捨と労働奉仕によって立派なモスクがつくられました。1万人は収容できるという大モスクです。それから、このモスク内部の様子ですが、たいへん美しい内装がなされています。こういうモスクが次々とできあがっていきます。それは民族的な誇りにも結びつきます。聖者廟への参詣も禁が解かれて、日本人と同じように、人々は現世利益の目的をもってこうしたところに参詣するようになりました。ソ連時代にはおさえられていた信仰心の発露、それがまったく自由化された結果、イスラーム復興が広がっていったのです。

その一方で、今度は政治化するイスラームもありました。これは特にウズベキスタンとタジキスタンで目立った現象です。イスラームというものが政治的な意味合いを持って語られるようになったのです。政権に対する抵抗や、異議申し立てのためにイスラームが登場するのです。ウズベキスタンの場合には、特に革新

派の系譜を引く人々が、徐々に政権との対抗関係を強めていき、それが政権による抑圧を呼び、その相乗効果によって、一部の過激派が国外に逃亡して、さらに武装闘争に転じていくという、極めて厳しい状況が90年代には起こってきました。

ただ、この時代の過激派たちはソ連の政治文化の中で育った人々なので、政権との戦い方を知りませんでした。たとえば、クーデタを起こして政権を取ろうと彼らは考えたらしいのですが、その方法について彼らは何も知らず、参考にしたのはレーニンの革命論だったということもあります。

それからまた、タジキスタンの場合には、独立してまもなく政治がたいへん不安定化しました。そうした中で、イスラーム復興党を中心とするグループと旧共産党系のグループとが戦い、流血の内戦に展開していきました。ただし、この内戦というのは、決してイスラーム対共産主義というイデオロギー闘争ではありません。むしろソ連時代から存在していた、いろいろな地域閥の間の権力闘争、資源をめぐる戦いという側面が強かったのです。イスラームの復興と政治化ということだけで説明できるわけではありません。

タジキスタンという国自体は中央アジアでもたいへん貧しい国であって、そこに内戦が起こったために、国家の将来が危ぶまれました。加えて、地図をご覧になるとわかるように、タジキスタンは南をアフガニスタンに接しています。当時アフガニスタンは内戦のさなかにあり、かつ90年代の半ば過ぎからは、イスラーム原理主義者として知られるターリバーン政権が急速に成長しつつありました。こうした中で、タジキスタンの内戦がアフガニスタンの内戦と結びついてしまうのではないかという危険性も高まったのです。

それに対して、関係各国、あるいはアフガニスタンの中でも、北部同盟でターリバーンと戦っていたタジク系のマスード将軍などがタジキスタン内戦の終結に向かって連携した結果、ようやく97年に国民和解が成立し、内戦が終わりました。その後、イ



写真02-a ウズベキスタン、フェルガナ盆地北部のカーサーン・サイの大モスク



写真02-b 同モスクの内部

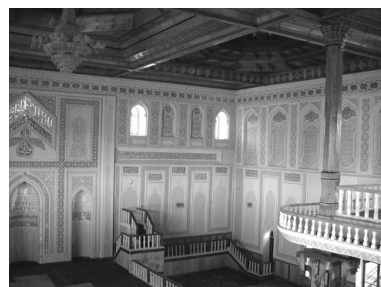


写真02-c 同モスクの内部

スラーム復興党自体も、中央アジアではたいへん珍しいことに、政党としてそのまま認められて現在に至っています。最近のイスラーム復興党自体は、選挙でも勝てずに、勢力としては弱体なのですが、中央アジア諸国でイスラームを基盤とした政党が認められているのはこのタジキスタンだけですので、その意味では注目できると思います。

## ——イスラーム復興の現在と未来

次に、イスラーム復興の現在と未来について多少触れておきましょう。ウズベキスタンの場合、特に有名なのはウズベキスタン・イスラーム運動という武装組織です。政権との対立の中で、郷土のフェルガナ盆地から国外に出て、特にアフガニスタンでターリバーンやアルカーイダなどと提携して力をつけた集団です。このグループは一連のテロ事件を起こし、日本のメディアでも報道されましたが、1999年キルギスの南部で日本人の技師が拉致された事件も彼らが起こしたものです。このような活動は、中央アジアの安全保障に大きな影響を与えました。

それと並行して、90年代の後半ぐらいからは、国際的なイスラーム復興主義組織の活動が中央アジアでも活発化しました。その代表的な例がイスラーム解放党という組織で、イスラーム国家の樹立をめざして宣伝や組織活動を展開しました。当然政権は警戒して、これに弾圧を加えるわけですが、それでもこうした勢力はなかなか後を絶つことがなく、活動を継続していきました。やがて9.11事件が起こると、これは中央アジアにも大きな影響を与えました。9.11以降は対テロ戦争という大義名分を掲げて、アメリカ軍がこの地域にも配備されました。これまでアメリカは、この中央アジア地域でほとんど基盤を持っていなかったのですが、これが契機となって、アメリカの影響力が高まりました。

一方、中国やロシアも、元来この地域に影響力を持っていたのですが、同じく対テロ戦争ということで、上海協力機構を中央アジア諸国も入れた形で立ち上げて、提携を深めていきました。そして、対テロ戦争のためには、アメリカもあまり中央アジア諸国の民主化についてはクレームを出さないという、一種の妥協が成立しました。じっさい、中央アジア地域の政治や社会を見ると、ソ連の解体後、期待された民主化や社会改革などは実際にはなかなか進まず、大統領を中心とした権威主義的な政治が強化されているというのが現実です。

そして政権の側はしばしばイスラーム原理主義の脅威を口実にして、政権の統制的、抑圧的な政策の正当化を図るということが行われてきました。そういう中で、大きな転機となるような事件が起こりました。それは2005年5月、ウズベキスタン東部の都市アンディジャンで起こった流血事件で、そのために多数の市民が犠牲になりました。

当局の発表によれば、この事件を起こしたのは、アクラミーヤと呼ばれるイス

ラーム復興主義のグループだと説明されています。それに対して、欧米各国はこのアクラミーヤという組織は決して過激な原理主義の集団ではないと主張して、見解は全く分かれました。ウズベキスタンのカリモフ政権の抑圧的な政策こそ、この事件の背景にあると主張する欧米各国とウズベキスタンとの間で、対立が激しくなりました。その後まもなくして、アメリカ軍はウズベキスタンから退場し、かわって、ロシアと中国の影響力がいっそう高まるという、国際関係にも大きな変化をもたらした事件でした。

そうすると、このアンディジャンの事件は、ますます注目すべきものになってくるのですが、残念ながら、この事件の真相については確実な資料がまだありません。最近の一研究によると、アクラミーヤ自体は、表面上はかなり穏健に見えるのですが、その背後にはやはりジハードを称揚する側面を持っていたこともわかってきました。ただし、この小さな宗教団体にこれほどの大きな事件を起こす力があつたと考えるのはなかなか無理があり、相当複雑で大がかりな背景があつたと考えるべきではないかと思ひます。

この事件が示すように、現代の中央アジアにおいて、政治化するイスラームは、やはり大きな潜在的な影響力を持っていると考えるべきでしょう。

全体を通してみると、中央アジアにおけるイスラーム復興は、ソ連という巨大な国家が崩壊した時に、この大きな渦から生まれた波の一つと考えてよいかと思ひます。そして、そこには普通の人々の生活の中に戻ってくるイスラームという側面と、もう一つ外からの、あるいは内からの要因で起こってくる政治化するイスラームという側面が両方あるということを確認しておきたいと思ひます。

イスラーム復興主義の人々は、真のイスラームへの回帰ということを唱えます。しかし、これは中央アジアに限らず、すべてのイスラーム世界についていえることです。が、真のイスラームを唱えるとしても、それは一体何かということに関しては、じつは合意はないのです。何か問題が起こると、真のイスラームへの回帰ということが説かれるのですが、人によってその解釈や展望はじつに多様なのです。

そしてまた、たとえば政治や経済の停滞などから起こってくる不満がイスラームと結びつくというローカルな要因もあれば、



写真03-a タシュケントの新しい大モスク



写真03-b 同上





写真04 キルギス北部、スサミルの村のモスク



写真05 同村の墓地からのながめ

グローバルなイスラーム復興主義組織のプロパガンダ、あるいは宣伝工作によって出てくる新しい流れ、そういうものが交錯している面もあります。今後も、中央アジアのイスラームと政治との間の相互関係は、大いに注目していく必要があると思います。

今年8月に、タシュケントの街を訪れて驚いたのですが(写真03-a, b)、タシュケントの中心街に、これまで学校や民家があったあたりに大モスクと広場ができあがっていました。わずか数ヶ月の突貫工事で作ったという大モスクで、大統領の発意で建立されたといいます。こういうモスクを見ますと、政権はイスラームの守護者たらんという姿勢を強調しようしていることがわかります。

片やこれは(写真04)隣のキルギス(クルグズ)の村の、地方のモスクです。アラブ諸国からの支援でできたモスクだそうで、

ウズベキスタンと比べると質素きわまりないのですが、こういうはらかな田舎にもモスクが次々とできています。

これは(写真05)丘の上から撮ったのですが、手前のほうはソ連時代の墓地で、ロシア人もキルギス人も同じ区域に葬られています。この墓地から見たモスクというのは、時代の変化を大きく感じさせる風景です。イスラームが持つダイナミズムは、今後とも、中央アジア地域を理解する上で、重要なポイントの一つになるだろうと考えています。ご静聴ありがとうございました。

[こまつ ひさお]